

作品タイトル

「20世紀エポテック少女 ― “安心”の演出」 Ethical × Poetic Observation on “Additive-free”

作品コンセプト

岩手・三陸は、海の仕事と食の記憶が折り重なる土地。

店頭のパッケージはしばしば、緑や湯気の“自然らしさ”と「無添加」という一語に安心を集約します。現状は法的表示の“最低限”には適合していても、“望ましい水準”の情報提示には届ききっていない――その境界を観測するのが本作です。

「無添加」が述べるのは添加物という一要素であり、「自然由来」とは同義ではありません。そこで、産地・栽培方針・検査など“上流情報”を、同じ面に並置できるキービジュアルとして提案します。技術の良否を断定するのではなく、情報がどこまで可視化され、どこで途切れるかを見つめ直し、おいしさの絵に“見えない安心”の気配を重ねます。

告発ではなく招待。

無添加＝入口、透明性＝ゴール。

その関係を一枚で描きます。

※一般論の例：白砂糖は“天然素材由来”でも精製工程を経る。したがって“無添加”でも“自然のまま”とは限らない――ここに日本の無添加慣用表現のほころびが生じやすい。

制作過程の情報整理において、製品パッケージの表示に時期差が見られ、現行では「無添加」の語が前面に用いられていないことを把握しました。かつて前面に置かれた語が静かに退いた、その“変化”を、現実と物語のあいだに生じるわずかなズレとして可視化します。

制作の意図・背景

観測時に「とんでもなくいい素材」という言葉が、産地・つくり手・設計思想といった価値軸を指しているということです。

それはラベルの一語「無添加」と同義ではありません。では、畑（栽培/有機）・遺伝子（BE）・検査（残留/放射性/微生物など）は、どの層で語られるべきか。実務では、これらがラベル外に退避しがちです。

本作は品質断定ではなく、**情報設計（UI）の提案**です。

「見える／見えない」の二層をつなぎ、“信頼”を情報の羅列ではなく体験として感じられる構造を描きます。

“Additive-free” works as a marketing word in Japanese, but in English it immediately turns into a list.

日本語では一語で安心をつくれても、英語圏では「どの添加物を？どの基準で？」という説明面がすぐに要求される――このギャップを埋めるための器としてUIを置きました。

「創造コンペ」という枠の内側で、表現と商業の境界そのものを主題化し、安心の演出を倫理・表現・商業のあいだに立つポエティックな虚構として観測します。

良心的な企業姿勢がラベルの言葉に先行することはあり得る。

だからこそ、言葉が消えた後の安心をどう継承し、どう伝え直すか――そこにデザインの余地がある、と考えます。

構成要素（UISキーム）

- ・ 上段：可視層（原材料／量目／アレルギー）
- ・ 下段：上流層（産地・栽培方針／BEの有無／残留検査／漁場注意）

“主張ラベル”はメーカー基準に依存し得るため、どの定義にも接続できる欄（カラム）をデザインの核に据えます。沈黙していた欄を欄として可視化し、「安心は一語では作れない」ことをUIで示します。「無添加」は日本独自の文化的言語だが、国際基準（ヴィーガン認証・FSSC22000などの透明性）へ橋渡しする。

パッケージ側コピー案

- ・ 「見える原材料。見えない栽培と検査。どちらも、食べもの。」
- ・ 「Additive-free ≠ Evidence.（一般論）」
- ・ 「味だけ？――ラベルの下に、安心の続き。」
- ・ 「無添加は、はじまり。“何が無添加か”まで、好きになりたい。」

引用

「未来を見せるんやったら、隠したもんまでちゃんと見せんと、ほんまの“生活”にはならへんやろ」
—— 日外涼香 『20世紀エコテック少女～名づけられなかった未来～Vol.1』(派生元：zine series)

免責・参考

本作は批判ではなく、概念の更新を目的とする一般的考察であり、特定の企業・商品を指しません。

参考：消費者庁『食品添加物の不使用表示に関するガイドライン』— 不使用表示は対象の明示が望ましいとされ、単独の「無添加」は誤認のおそれが高いと整理されています。

また、現行の実パッケージでは「無添加」の前面強調が後退する事例も見られます。

“無添加”が照らしていた安心は、いま別の灯り（ヴィーガン、由来開示、検査の透明性、衛生・品質マネジメント）へ受け継がれつつある。

ラベルは言葉の化石ではなく、更新される約束である——その更新の瞬間を、可視層／上流層の二段でスケッチする試みで、“次の安心”を設計するビジュアル提案です。

結語（詩的余韻）

——“安心”という言葉が消えたあと、どんな香りが残るのか。
香りの余韻そのものを、観測しつづけたい。